Toshiharu・Hisathune

久恒 俊治 第3回生

「友禅空間」をプロデュース

Profile

加賀友禅伝統工芸師作家　鶴見保次工房入門。加賀友禅模様師として独立。皇太子妃雅子様、御婚礼用桐箪笥の油単に加賀友禅を染める。手描友禅とコンピュータグラフィックスを融合させた染色を考案。

友禅夢樹六曲屏風「早蕨の歌」

花鳥風月の絵模様を描いた加賀友禅は糸目という防染糊が命。模様の輪郭が白い線になり、色のにじみを止め、繊細な模様を描くことができる。糸目の技術を利用し木に直接友禅模様を染め上げた作品。

工房拝見

友禅の美しさを身近に感じていただけるよう、生活の中のインテリアとして友禅模様を施す。

新聞の募集広告で弟子入り

加賀友禅模様師になったきっかけは、大学時代に第一次オイルショックの時で世の中が雑然として、サラリーマンで会社勤めをするより、一から自分の思いで出来る仕事が良いのではと思った。そんな折、弟子募集の広告が目に付き飛び込んだ。師の元で最後の模様を彩色終えた時、涙が出て自分の歴史の一つが終わった気がした。腕一本、感性で生きる世界が待っていた。

私なりの独自性を求めて

バブルも弾け伝統工芸の世界も生き残りを賭ける環境に置かれている。以前カタライザーより日本の伝統工芸も大変厳しくなるから、ナンバーワンよりオンリーワンを目指せと言われた。試行錯誤している時、新築中の家より檜の香りがして、大工さんより鉋屑を貰い染料で染め、きれいに染まった。防染方法を確立出来ると絵が描ける、木に友禅染めをしようと決めた。今の生活も考えて欲しいと妻は反対したが、誰かが道を着けたのか一人で走っていた。今は家具など調度品に友禅を描いている。

加賀友禅の着物

江戸時代、パテレンは日本女性を見て絵画を着ていると言った。今、友禅は色を着ると言われる。色の構成は人間社会と似ていて、引き立つ色、地味な色、全て必要バランスが大切。着て感動を与える手描きの作家物これが創り手の命だ。

星城高校の後輩へ

私が居る世界は、上手い下手が直ぐ判り、ごまかしが効かない。上手くない所は素直に理解し対策を講じることが出来れば、上手くなるきっかけが現れる。ピンチをチャンスにする事も出来、思いが現実化する。